元ヤン少年がヤンデレと美少女とめがねの4人で全国大会を目指す物語

ひらっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
元ヤン少年がヤンデレと美少女とめがねの４人で全国大会を目指す物語

【Ｎコード】
Ｎ９１１９Ｙ

【作者名】
ひらっち

【あらすじ】
「平井楓」。１５歳。中３。つい半年前までヤンキー。でも今はまっとうな中学生・・・のはず。その脱ヤンのきっかけとなった少女「篠原葉月」と共に転校した中学校で、彼は変わった部活に入部する。いや、入部する葉月に巻き込まれる。そしてその部活の名は「ディベート部」。ディベートなんて聞いたこともない楓たちに唯一の部員「九条いのり」はこう宣言した。「私たちディベート部は全国大会を目指します！」・・・という熱い青春ものになる予定。

ノリと思いつきで書いているので、ストーリーは文章に乱れがあると思いますがご了承ください。

プロローグ1

ディベートとは、２つの立場に分かれて第三者を説得する形で行われる議論のことです。

ディベートでは、一定のルールに従って、肯定側と否定側のどちらかをランダムに担当して議論を行います。このように、自分の意見と切り離して議論を行うことで、物事をさまざまな角度から考えることになり、より深い思考を展開できるようになります。
また、競技ディベートでは中立の立場にある審判を説得しなければなりませんから、相手をやり込めるような物言いは評価されません。説得のために努力することを通じて、議論のための議論ではなく、より妥当で説得力のある議論を考えようとする態度や能力を身につけることが出来ます。
このように、ディベートでは、準備や試合を通じて議論を楽しみながら、論理的思考力や分析能力など、現代社会で求められる「自分で考えるための力」を養うことができるのです。

「う～ん・・・これじゃパンフレットそのままだよね」

机いっぱいに広げられた画用紙にはびっしりと文字が書き込まれている。
そして机の端には「ディベート甲子園」と書かれたパンフレットが広げられている。

「それに、字、見難いし・・・」

それにどうやらこの文章量を画用紙一枚に書き切るには無理があるようだ。

「どうしようかな・・・」

そういうと少女は再び黙り込んでしまった。
と、ひとつのプランを実行しては再び思案するということを続けて1時間近くが経とうとしている。すでに画用紙が広げられた机の周りには無数の画用紙の残骸が散らばっている。

そんな教室の中にポツリと一人新しい画用紙とにらめっこしていた少女はふと顔を上げた。どうやら妙案を思いついたようだ。

「そうだっ！とにかく来てもらえればいいんだよね。話はそれからだよ！」

そういうと少女は、画用紙に色ペンでなにやら書き始めた。

暖かい春の風が少女一人だけの寂しい教室のカーテンをなびかせた。
ディベート部の最後の生き残りは、ディベート部復興のため今日も全力投球・・・なのだろう。

その後、少女は完成したポスターを校内掲示板に貼り付けた。誰もの目を引く色鮮やかな画用紙には、こう簡潔に書かれてあった。

「ディベート部　部員募集中！！
旧校舎３階でお茶やお菓子を用意しています！！
詳しくは、３年１組九条いのり《くじょういのり》まで」

プロローグ2

「おい、楓、この部活おもしろそうだな」
「はいはい・・・そうですね」

もういい加減にして欲しい。
何回目だと思っているんだろうか。

「『はい』は一回だ！」
「はい」
「それにさっきから思いっきり無関心じゃないか！」
「そりゃそうですよ。じゃあ言わせてもらいますが、このやり取り何度目ですか？」

一時の沈黙。そして、

「そ、そんなん覚えてるわけがないじゃないか！」

そんなことだろうと思いましたよ。
自分でもおぼえてないほど繰り返してるってことですね。
まぁ僕も覚えてないんだけどね。でも、記憶する限りでは、「サッカー」「バスケ」「野球」「バレー」「陸上」「水泳」「テニス」などの主要な運動部や「茶道部」「放送部」「文芸部」「化学部」「合唱部」「吹奏楽部」などの文科系の部活は回ったと思う。

何かに入部したいといって見学を提案したのは僕じゃない。
なのに、少し見ただけで「つまらない」といっては次の部活に行くという事を繰り返しているのだ。
言いだしっぺがこれでいいのか？僕は無理やり同行させられてるだ

けだぞ。

「とにかく、この部活行ってみるぞ。お菓子やお茶とか書いてるじゃないか」

「まぁたしかに気になりますね」

たしかに目の前のポスターにはそう書いてある。っていうかそれしか書いてないって言ってもいい。

「にしても、嬉しそうな目をしてますね」

「どんなお菓子があるのか楽しみだからな！」

部活の見学に行くんじゃないのか？明らかに現金すぎるでしょ。そうやってお菓子とかから離れられないからやせないんですよ。だから体重が気になるんですよ！！そして、体重のことをいつも僕に八つ当たりするのやめてください！！

・・・おっとちょっと脱線しすぎたか。

「おい楓？今何か失礼なことを考えなかったか？」

「いいえ！！一切考えておりませんっ！！」

「そうか・・・なんかふと体重が気になってな」

なっ。まさか僕の心を読んだのか・・・読心術か！？

「まぁ何もないならいい。とにかく行くぞ楓。」

「はいはい・・・もうこれラストにしましょうね。これじゃ埒が明かないですよ」

「分かった・・・。とにかく行くぞ」

そういったかと思うとずんずん進んでいく。
ちょっと歩速速すぎやしないか・・・。
本当に元気が有り余っているんだろうな・・・。

「はぁ・・・」

最近こんなため息をつくことが多くなってきた。
これも全て今僕を振り回す彼女のせいだ。

数メートル先に進んだ彼女が振り返る。

「早く来い楓！遅いものには罰だ！死刑だ！！」

彼女はそういいきると再び歩を進める。
そう。今僕の前を歩く彼女が篠原葉月。ここ最近の僕のため息の元凶だ。

それにしても変わった部活だと思う。

「ディベート部」。
全然聞いたこともない。
お菓子やお茶を出すってことは、なにか調理系の部活なのだろうか・・・。
料理は苦手じゃない。実際一人暮らしの身だから簡単な料理ならこなせる。する気はないけど。

「遅いぞ楓！遅いものは死刑といってるではないか！」
ここで思考は中断。葉月の大声が耳に響く。本当に元気だ。

「はいはい・・・」
「だから返事はいっか――」
「はい。分かりましたよ篠原さん」

こんなときは素直に従うが吉だ。
文句なんて言おうもんなら、またまためんどくさいことが待っている。と僕の経験が告げている。

「また篠原さんと・・・。名前で呼んでいいといってるだろ・・・」
というかなぜそこでしおらしくなる？
さっきまでの元気はどうした？

「まぁ、考えときますよ」

それにしてもなんか葉月を名前で呼ぶのは気が引ける。他人の前ならいいんだけど、なぜか本人を目の前にすると、名前で呼ぶ気がなくなってしまう。

「おい！早く行くぞ楓！」

気づいたら葉月はまただいぶ先まで行ってしまっていた。

「はぁ・・・」

やっぱりさいきん本当にため息が多くなってきた。

始まりと出会いと（前書き）

最近更新がおろそかになっていたので・・・。
書き溜めた分があまりないので、短めの更新になりますがご了承ください。

始まりと出会いと

「んじゃ入ってくれ」

その声を聞き、僕はやけにすべりの悪い扉を開いた。
同時に、クラス中の視線が集まるのを感じる。
好奇の視線というところか。
決して悪い気分じゃない。

「転校生の平井楓君だ。それじゃ一言自己紹介を良いかな？」

「今年からこの学校に転校した平井楓です。よろしくお願いします」

そう僕が言うと、教室からぱらぱらと拍手が起こった。
多分皆はもっと気のきいた自己紹介を期待していたのかもしれない。
でも僕はそんなうまいことが言える人間ではないから、そこらへんのところは堪忍して欲しい。

「平井の席は、そうだな・・・マイケルの横でいいか？」

マイケル？？外人か？

「まぁいいっすよ～」

担任の提案に答えたのは窓際の一番奥の少年だった。
・・・いたって普通の日本人だった。

「・・・」

僕はなんとなく騙された気分でマイケルと呼ばれた少年の横の席に腰掛けた。
声をかけてきたのは相手からだった。

「俺が井上マイケル。マイケルって呼んでくれ」
「それ本名だったんだ・・・」

目の前にいるのは、どうみても日本人なのだ。
あだ名と考えるしか「マイケル」は説明できない。
まぁ一応別の可能性もあるから確認してみる。

「もしかしてハーフ？クォーター？」
「いいや、俺はれっきとした日本人だぜ」

マイケルはそう言い切ってしまった。

「じゃあどうしてマイケルなんて名前に？」
「なんかうちの親父が変わりもんでさ、加えて子供のころはアメリカで育った帰国子女なんだよね。だからマイケル」

唖然とした。

「強烈な・・・父親だな」
「まぁな」

どうやらマイケル自身は名前のことは気にしてないようだ。というかそういう表情をしていた。
もしかしたらこんな問答は慣れてしまったのだろうか。
そんなことを考えているうちに朝のＳＨＲは終わってしまったよう

だった。
担任が去った教室に人だかりができる。
僕を中心にして。
このままだと当分解放されそうにはないな・・・。

始まりと出会いと（後書き）

次回からは少量ずつちょこちょこ更新していきます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9119y/

元ヤン少年がヤンデレと美少女とめがねの4人で全国大会を目指す物語

2012年1月6日22時45分発行